

## 超越論的心理学の「批判」について

Kondo, Shu / 近堂, 秀

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

2007-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008152>

# 超越論的心理学の「批判」について

近 堂 秀

本稿の目的は、カントの『純粹理性批判』の心理学的要素の積極的な意義を示すことにある。その際に手がかりとなるのが、ストローソン以後の『純粹理性批判』の心理学的解釈である。以下、まず近年の『純粹理性批判』研究の動向を概観したうえで(一)、超越論的心理学を「批判」するカントの狙いを踏まえつつ(二)、カント哲学と現代の「心の哲学」との接点を探っていく(三)。

## 一 カントの「心の哲学」？

いわゆる超越論的論証という哲学的論証方法に関する

P・F・ストローソンの主張<sup>(1)</sup>がさながら超越論哲学対分析哲学といった様相を呈して、一連の大掛りな論争となつたのは、周知の通りである。唯一の健全な超越論的論証は寄生論証である<sup>(2)</sup>、とするR・ローティが下した消極的な評価<sup>(3)</sup>をもつて終結を告げられたかのような観もあるこの論争ではあるが、その後のカント研究に大きな影響を与えたのは間違いない。

ストローソン自身は、『純粹理性批判』解釈として、みずからの見解をカントの議論とつきあわせつつ練り上げていった<sup>(4)</sup>。その解釈の基本戦略は、「総合」という心理学的要素を完全に「素通り」してカントの議論から観念性を払拭することである。こうした戦略にしたがって、『純粹理性批判』の演繹論と観念論論駁から自己意識の統一と客観性

の分析的連関に対する論証を導き出すと同時に、合理的心理学批判に基づいてデカルトの自我論を論駁することが試みられたのである。端的に言うならば、カントの自己意識論を代名詞「私」の意味論として再構成することであり、したがって行動主義的な解釈としてこれは特徴づけられるであろう。

ところが、ストローソンの解釈を契機として、『純粹理性批判』の心理学的要素の意味が見直されることになる。新たな『純粹理性批判』の心理学的解釈としては、さしあたり三つの立場が挙げられる。第一の立場が伝統的形而上学からの影響を重視するアメリカスの解釈<sup>(5)</sup>、第二の立場が「総合」概念を機能主義的に理解するキツチャーの解釈<sup>(6)</sup>、第三の立場が「統覚」概念の言語分析哲学的な意味を明らかにするブルックの解釈<sup>(7)</sup>である。

### (1) アメリカスの非唯物論的解釈

アメリカスはストローソンの解釈を手がかりに、『純粹理性批判』誤謬推理章の議論にカントの伝統的形而上学へのコミットメントを指摘する。つまり、前批判期の『形而上学講義Ⅰ』に残存する魂の実体性や単純性の証明は、ヴォルフ学派からの多大な影響がそこに認められるが、批判期後半に至っても明示的に論駁されていない。とりわけ『純粹理性批判』第一版の誤謬推理章では、あくまで魂

の実体性の基礎づけが不可能であることが示されるのみで、それはむしろ心の非物質性の見解として理解される、というのである。こうした評価に基づいて、カント独自の見解として次の主張が導き出される。すなわち、人格同一性はたんに内省によってアプリオリに認識されうるものでもなければ(ロックやライブニッツ、合理的心理学者に対して)、通常は経験的基準にしたがって規定できるが(シユーマイカーやウィトゲンシュタイン主義者に対して)、根源的には物理的基準にしたがって確実に認識されうるものでもなく(ベネットやストローソンに対して)、不可知の同一性(な いしは非同ー性)として最も重要である(パーフィットやペリーに対して)。つまり、アメリカスがカントに帰すのは、人格同一性が分析不可能であるとする見解である。

### (2) キツチャーの唯物論的解釈

一方、キツチャーはストローソンが無視した「総合」概念をむしろ積極的に解釈して、超越論的心理学の意義をそこに見出す。カント自身による総合概念の定義に注目したキツチャーは、それを次のように理解する。すなわち、総合とは、「二つの作用、あるいはより中立的には、表象を産出する過程」である。つまり、「異なる認知状態が含まれている多様な要素を、その認知状態からさらに後のその要素を含んでいる状態の中で、付け加えたり結合したりする」こ

とである。したがって、総合には心の因果性が含意されており、これによって一連の物的状態から異なる物的状態が産出される一方で、一連の心的状態から異なる心的状態が産出される、と解釈される。この総合概念に認知内容を機能として捉える機能主義が結びつけられて、超越論的心理学が展開される。そこで主張されるのが、ヒュームの人格概念の不整合を修正する「心的統一 (mental unity)」である。心的統一とはつまり、「認知状態が属する」一つの意識で、認知状態の連結性という時間を通じた人格同一性を意味する。ただし、以上のように解釈するさいに、キッチャーは自己意識の統一や自発性といったカントの「統覚」概念の核心を「素通り」して、統覚の超越論的な意味をすべて現象的な自我へと還元してしまう。結局、「自然化」されたカントにとつて、感性および構想力と悟性との区別や超越論的な観念性にはや本質的な意味はないことになる。要するに、キッチャーの解釈では、自然主義的還元が前提されたうえで、これと両立する範囲で心理的連結性に基づくような人格同一性が主張されているのである。

### (3) ブルックの中立的解釈

キッチャーの唯物論的な解釈に対して、カントの自己意識論を存在論的には中立的なものとして維持しようとするのがブルックの解釈である。ブルックはシューメイカーの

自己言及性に関する言語分析的考察を援用しつつ、いわばハードウェアの本質から独立に考察される自己意識の特有性を明らかにする。それは次の二つのステップからなる。

(a) われわれは、主観を「超越論的に」指示するとき、「その固有性もいさかも気づくことなく」(A35)、主観を意識する。それゆえ、(b) 自己の帰属的意識、自己自身の固有性としてその性質を意識することは、自己自身としてたんに自己を意識すること、つまり自己の非帰属的意識としての自己意識について、これを「前提する」(カント)、あるいは「潜在的に可能なもの」(シューメイカー)にする。(a) に関して、自己の性質としての何らかの自己を意識するために、その性質を意識することから独立した仕方では自己を意識しなければならないとする「ネーゲル||カスター ニエーダ||シューメイカー論証」によって支持されている。(b) の主張にあたってカントが誤謬推理章のなかで用いたのが、この論証の一種である。ブルックはこうしたきわめて特殊な自己意識が与える統一こそカントが演繹論で提示した統覚概念にほかならないとして、それを「包括的表象 (global representation)」として特徴づける。この表象は、様々な志向的な表象を「唯一の包括的客観 (single global object)」として含む、「表象的基盤 (representational base)」と見なされうるものである。さらにブルックは、カントの統覚概念を自己意識の通時的な統一として切り詰めたキッチャーを

批判して、これを自己意識の共時的な統一として理解する。

以上が新たな『純粹理性批判』の心理学的解釈の三つの立場である。アメリカスは誤謬推理章の形而上学批判を非唯物論的な主張として理解したうえで、そこから不可知の人格同一性という見解を導き出す。他方、キツチャーは演繹論の自己意識論を機能主義と整合するように唯物論的に読み換えて、さらにそれを人格同一性の還元主義的な見解と結びつける。これに対してブルックは誤謬推理章の議論を援用しながら演繹論を解釈して、その自己意識論を中立的な見解に位置づける。カント自身の「心の哲学」は、いずれの立場を支持するのであろうか。

## 二 魂の形而上学への批判

『純粹理性批判』という著作は「超越論的原理論」と「超越論的方法論」に区分されており、この内の原理論に「超越論的感性論」と「超越論的論理学」という二つの主要部門が含まれている。超越論的論理学はさらに分析論と弁証論の二部からなるが、分析論が演繹論を中心に自然概念の客観性を明らかにするものであるのに対して、弁証論で取り扱われているのが魂・世界・神という伝統的形而上学の三つの概念である。ここで検討するのは、魂を対象とする

合理的心理学を批判する「純粹理性の誤謬推理について」と題された一章である。よく知られているように『純粹理性批判』の第二版は大幅に改訂されているが、特に集中的に手を入れられたのが演繹論と誤謬推理章である。続いて、書き改められた部分に注意しながら、カントの合理的心理学批判の要点を確認していこう。

カントによれば、合理的心理学とは、「私は思考する」と「唯一の原典」とする学である(Vgl. A343/B401)。つまり、「思考するものとしての自我(ich, als denkend)」である「魂(Selbst)」を内的感官の対象と見なして、その実体性・単理性・同一性・観念性を誤って推論するものである(Vgl. A342/B400)。すなわち、魂は(a)すべての私の可能的判断の絶対的主語であるゆえに実体であり、(b)その作用が決して多くの作用する物の共働とは見なされえないゆえに単純であり、(c)異なった時間の中で自己自身の数的同一性を意識しているゆえに人格であり、(d)外的感官の対象の現存在が与えられた知覚に対する原因としてのみ推論されるゆえに疑わしいのに対して、その現実存在が確実なものである。第一版の誤謬推理章では、以上の主張が三段論法の形式で導き出されている。

そもそもカントが合理的心理学としてどのような思想的立場を想定していたのか。実際のところ、この点についてカントのテキストでは十分に明らかにされていない。もち

ろん、合理的心理学がヴォルフ学派の形而上学の一部門に位置づけられるのは間違いない。しかし、魂を内的感官の対象とする議論の前提からしてすでに、ヴォルフ学派の合理的心理学と単純に重ね合わせることができない。経験的心理学における魂の能力の分析から合理的心理学における魂の本質の認識への展開に先行して、ヴォルフは三段論法の形式で次のように魂の現実存在を証明している。「それ自身と他の物を意識しているものは存在する。われわれはわれわれ自身と他の物を意識している。それゆえ、われわれは存在する」(8)。ところが、カントが取り上げた合理的心理学にはこうした証明が欠けているのである。

このあたりの事情に関しては、H・クレメが次のような説明を与えている。(9)。一八世紀のドイツでは、ヴォルフ学派の合理的心理学の領域で、「演繹的三段論法的モデル」として特徴づけられるような、「魂(Seele)」の本質の概念的認識が試みられていたが、その一方でその経験的心理学の領域では、ビュフォン、ルソーとボネ、フレーゲルをその三つのヴァリアンテとする、「分析的観察的モデル」による魂の現実存在の直覚的認識が主張されるようになっていった。七〇年代のカントもまた、経験的心理学ないしは人間学の領域で「分析的観察的モデル」の方法を用いた。それによって、魂の自己直観に基づいて自由かつ単純で非物質的な実体として自己自身が認識される、と考

えられていたのである。その一方で、『形而上学講義1』の合理的心理学では、総合的方法にしたがって、自己意識の統一から導出されるべき純粹カテゴリーが現存するものとして前提されている魂へと適用されている。結局、批判期には、「私は思考する」という命題に新たな意味を与えた自己意識論によって、合理的心理学の証明が斥けられると同時に自己の直覚的認識もまた放棄されるのだが、こうした主張は批判期後半にさらに徹底されていく。——以上のような思想発展史的研究に基づくクレメの説明をみるかぎり、カントがここで批判の対象としている合理的心理学は、厳密には、ヴォルフ学派の議論を下敷にしつつも、魂の自己直観というデカルト的な構想を出発点としてこれをカント独自の観点から整理したものと考えるべきであろう。

では、合理的心理学のどこに誤謬が認められるのか。カントが攻撃するのは、その推論がすべて「媒概念曖昧の虚偽」を犯しているところである。つまり、媒概念が大前提では超越論的に使用されているのに対して、小前提では経験的に——しかも、対応する直観があらかじめ与えられていないという許容されない仕方——使用されている、というのである。カント自身が具体的な説明を与えているのは、第一版では実体性の第一誤謬推理についてなので、それを見てみよう。

その表象がわれわれの判断の絶対的な主語 (Subject) であり、それゆえ他の物の規定として使用されえないようなものは、実体である。

私は、思考する存在者として、すべての私の可能的判断の絶対的な主語であり、だから私自身についてのこの表象は、何らかの他の物の述語としては使用されえない。それゆえ、私は、思考する存在者 (魂) として、実体である。(A348)

「絶対的な主語」＝「実体」というカテゴリーの超越論的使用と「思考するものとしての自我」＝「すべての内的経験の対象」＝「絶対的な主語」としての「実体」というカテゴリーの経験的使用がこの証明には同時に含まれている、というのがカントの説明である (Vgl. A402f)。ところが、書き換えられた第二版では、証明の誤りとして指摘されるポイントがこれと異なっている。しかも、実体性の第一誤謬推理の三段論法の各命題自体にも手が加えられている。

主語 (Subject) 以外の何ものとしても思考されえないものは、また主語以外の何ものとしても現存せず、それゆえ実体である。

ところで、思考する存在者は、たんにそのようなものとして見なされるならば、主観 (Subject) 以外の何もの

としても思考されえない。

それゆえ、思考する存在者も、そのようなものとしてのみ、つまり実体としてのみ現存する。(B411)

『媒概念曖昧の虚偽と断定されている点は両版とも共通するが、媒概念の両義性について両版で異なっている。第二版では、「思考」という媒概念が大前提で客観一般と関係づけられている一方で、小前提でその概念のもとであらゆる客観的なものが捨象されていると考えられている (Vgl. *ibid.*)。クレメの思想発展史的研究に基づくならば、『純粹理性批判』誤謬推理章の合理的心理学とは、厳密には、ヴォルフ学派の合理的心理学を下敷にしつつも、魂の自己直観というデカルト的な構想を出発点としてそれを独自の観点からカントが再構成したものとみるべきであろう。とすると、第一版の合理心理学の証明はそうした再構成を通じて与えられているが、第二版ではカント自身の立場の徹底によりその再構成にさらに手がくわえられていると考えられるのではないか。つまり、客観的なものが捨象されている思考、という第二版の証明に対するカントの指摘は認識能力の主観的な区別を前提にしており、その区別を問題とする「反省」の水準にあるのが第一版の証明かと思われるのである (Vgl. A261/B317)。さらに、認識能力に対する反省という

ところに注目しながら、合理的心理学の誤謬推理を指摘するカントの狙いを確認して、超越論的心理学の「批判」の「心の哲学」としての意義を明らかにしたい。

### 三 超越論的主観と意識経験

まず、カントが合理的心理学を「批判」する要点から検討していこう。カントによれば、第一・第二・第三誤謬推理については、(a)「思考するものとしての自我」はあくまで「思考の論理的主語」であって「属性の實在的主体」ではなく(Vgl. A350)、(b)それについて「論理的統一」としての「単純性」が「超越論的に表示される」が「現実的単純性」が認識されるわけではなく(Vgl. A355f)、(c)その「論理的同一性」は「客観的な持続性」とは異なるとされる(Vgl. A362f)。つまり、「思考するものとしての自我」としての魂に実体性・単純性・人格性を帰属せしめて、内的感官の超越論の対象を想定したうえで、そうしたある種の概念的な表現には「超越論的主観 $\parallel x$ 」の「論理的意義」のみ認められると主張されているのである。さらに第四誤謬推理については、(d)内的感官の超越論の対象に対する外的感官の超越論の対象の關係から観念性を推論できるわけではないが、外的経験と内的経験の現実性は超越論的主観の内で確実であるとされる。要するに、「思考するこの私、

あるいは彼、あるいはそれ(物)を通じて表象されるのは、思想の超越論的主観 $\parallel x$ 以上の何ものでもない」(A346/B404f)と誤謬推理章の導入的な箇所であらかじめ説明されている超越論的主観について、その積極的な意義が以上のような議論を通じて提示されたと考えられるのである。とすると、超越論的心理学の「批判」は、主観的な「反省」の過程として理解されるべきとなる。それは、内的感官の超越論の対象である魂はいかなる客観的なものでもありえず、論理的な主観としてのみ意識される自己であると導き出される過程である。「超越論的心理学」ないしは「純粹心理学」の「誤謬推理」の「批判」という第一版の各誤謬推理に付せられたタイトルは、批判哲学特有の意味で読まなければならない。

ここで注目したいのが、以下のカントの文言である。人格性の第三誤謬推理への批判では、人格同一性について次のように述べられている。「この全時間が個体的統一としての自我の内で見出されると言おうと、私が数的同一性をもってこれらすべての時間の内に存すると言おうと、同じだからである」(A362)。さらに、観念性の第四誤謬推理への批判では、経験的實在論の立場が「 $\dots$ 言ひ表されている。「その」(「空間」)の内ですべては相互並存するが、それ自体はわれわれの内にある空間である」(A370)。すべてを含む空間と私を含む時間をさらにその内に含む「自我」ないし



は「われわれ」とは、超越論的主観にほかならない。したがって、同一的かつ単純な主語として意識される自己である超越論的主観は、時空をその内に含み、それゆえに一切の経験とその内に含む自我であることになる。

一切の経験をその内に含む同一的かつ単純な主語としてみずから意識する自我、という極度に抽象的なカントの主張をただちに理解することは難しいかもしれない。そこで、D・シュトゥルムが提案している「疑似客観 (Quasiobjekt)」という概念を援用して<sup>10)</sup>、超越論的主観を個人の意識経験の枠組みで解釈しよう。疑似客観とは、自己意識の志向的な相関概念に固有なものとして経験の内に存在する「非経験的な事例」である。自己意識はこれによって、経験の可能的対象の概念的ステイタスをもたずに、「指示者」として「その指示者との差異化ないしは客観化の遂行」に結合される。この「疑似客観」という概念によって、超越論的主観としての自我は自己意識に含まれる第三者的な視点として、経験の内部に志向的かつ非経験的な仕方存在することになる。カントは超越論的心理学の「批判」を通じて、「超越論的心理学の架空の主体」<sup>11)</sup>——あえてストロウソンの言葉を借りよう——としての魂の客観化を拒否する一方で、経験との関係における主観として自我を位置づけた。心的なものをそのみで捉えようとするのではなく、論理的なものとの結びつきを通じて心的なもの

の認識論的な前提を明らかにするという、合理的心理学のいわば脱心理学化を通じて明らかにされた<sup>12)</sup>この普遍的な自我は、志向性の概念と関係づけられることで、分析哲学的な意味で理解されるようになるのである。

合理的心理学を批判しなければならぬカントの問題意識を踏まえるならば、『純粹理性批判』のテクストから以上の解釈を裏づけることもできよう。やはり誤謬推理章の導入的な箇所(Verl. A346f/B404f)、「最初には奇異なことのように思われるにちがいない」と但し書きが加えられたうえで、思考する存在者が私の自己意識を他の物へと「転移(Ubertragung)」したものにほかならないことが説明されている。さらに決定的なのが、単純性の第二誤謬推理が否定されるなかで、以下のように述べられているところである。

明らかなのは、人が思考する存在者を表象しようとする場合、この存在者の立場に自己自身を置き換えて、その人が吟味しようとしたこの客観にみずから自身の主観を押しつけなければならぬ、ということ(このことはいかなる他の種類の探究でも該当しない)、そして、われわれが思想のために主観の絶対的統一が要求されるのは、さもなければ「私は思考する(一つの表象の内での多様なもの)」とは言えなくなる、ということである。という

のも、たとえ思想の全体が分割されて多くの主体の間で分配されたとしても、主観的な自我は分割分配されないが、にもかかわらずわれわれはすべての思考にさいしてこの自我を前提するからである。(A353f)

カントは超越論的心理学の批判を通じて、私という主観の制約が他の思考する存在者にも妥当する根拠を問ひ直す<sup>(13)</sup>。特に、超越論的主観の単純性が要請される一方で觀念性の第四誤謬推理が退けられるのは、複数の主体の間で思想を分割分配しうる可能性を前提としたうえで、そうした複数の主体の特殊性が一切度外視されるような普遍性が考えられているからである。このことはまた、人格性の第三誤謬推理が「他者の観点」からの考察を通じて否定されているところにも端的に示されている。さしあたり想定された内的感官の超越論的対象としての魂ないしは自我が、複数の主体の存在という存在論的前提のもとで普遍性を要求されて、「他者の観点」から捉え直されるとも言えよう。ここから超越論的主観と個人の意識経験とを関係づける妥当性が裏づけられる。

結論を急ごう。アメリカクスの非唯物論的解釈については、まず伝統的形而上学からの影響という評価が思想発展史的観点から否定されるが、それ以上に問題なのが、超越論的主観に対する反省という思考の次元が十分に汲みとられて

いない点である。誤謬推理章からただちに不可知の人格同一性を導き出しうるとするならば、カントによる理論と実践の厳密な区別の意味が見落とされるのみならず、超越論的主観と経験とを正確に関係づけることも不可能となろう。また、同様の理由から、キツチャーの唯物論的解釈も否定される。超越論的主観をすべて現象的な自我に還元してしまつては、カントの思考の独自性を十分に捉えられない。もつとも見込みがあるのはブルックの中立的解釈であろうが、超越論的主観と個人の意識経験との関係について十分に明らかにされているとはいえない。さらに、キツチャーが正しく捉えていなかったにせよ、ブルックの主張とは異なり、カントの議論をシュローマイカーの見解<sup>(14)</sup>に結びつけることによって人格同一性の問題は解決されうると思われるが、この点については機会を改めて検討したい。

## 注

カントからの引用箇所については、慣例にしたがって『純粹理性批判』の原版第一版をA、第二版をB（第一版のみの箇所はA）として頁数を表記した。

- (1) Vgl. P. F. Strawson, *Individuals*, London 1964.
- (2) Vgl. R. Rorty, Verificationism and Transcendental Arguments, in: *Noûs*, 5, 1971, p. 5.
- (3) <ヘンリッヒ・アーペル>、ローテイ他『超越論哲学と分析哲学』竹市明弘編、産業図書、一九九二年、参照。
- (4) Vgl. P. F. Strawson, *The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen & Co.Ltd. 1966. (『意味の限界』熊谷直男、鈴木恒夫、横田栄一訳、勁草書房)
- (5) Vgl. K. Ameriks, *Kant's Theory of Mind. An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, New Edition, Oxford 2000. なお、アメリカスに依拠した誤謬推理章の解釈としては、次の文献を参照。美濃正「ロックとカント」、『講座ドイツ観念論1 トイツ観念論前史』弘文堂一九九〇年。
- (6) Vgl. P. Kitcher, *Kant's Transcendental Psychology*, Oxford 1990.
- (7) Vgl. A. Brook, *Kant and the Mind*, Cambridge 1994.
- (8) Vgl. C. Wolff, *Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, Halle 11751 (1719) [*Gesammelte Werke*, I, 2, 1983], §6; *Psychologia empirica...*, Frankfurt/Leipzig 1738 (1732)

- [*Gesammelte Werke*, II, 5, 1968], §16; A. G. Baumgarten, *Metaphysica*, Halle 1757(1739) [wiederabgedruckt in: *Kant's gesammelte Schriften*, Akad.-Ausg. XV u. XVIII], §504.
- (9) Vgl. H. F. Klemme, *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis* (Kant-Forschungen; Bd.7), Hamburg: Meiner 1996.
- (10) Vgl. D. Sturma, *Kant über Selbstbewußtsein. Zum Zusammenhang von Erkenntnistheorie und Theorie des Selbstbewußtseins*, Hildesheim 1985.
- (11) Vgl. Strawson, *ibid.*, p. 32. (前掲訳書「二二三頁」)
- (12) 近代啓蒙思想の心理学が脱心理学化される過程については、次の拙論を参照。「心の存在と非存在—近代啓蒙思想の「I」の学—」、『理想』第六七二号、理想社、二〇〇四年。
- (13) 加藤泰史「カントの《Übertragungstheorie》と他者の問題」、『理想』第六六三号、理想社、一九九九年、参照。
- (14) Vgl. S. Shoemaker and R. Swinburne, *Personal Identity*, Basil Blackwell 1984. (『人格の同一性』寺中平治訳、産業図書)